

論文の和文要旨	
論文題目	「範列関係明示の複合副助詞」の設定 ——「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などをめぐる 考察——
氏名	帰 翔(き しょう)
本研究は、「太郎<u>にかぎらず</u>次郎もそのサークルに参加した」「この植物は温帯<u>だけで(は)なく</u>寒帯にも分布している」「先生は花子の<u>かわり(に)</u>良子を褒めた」の下線部を代表とする一連の表現を対象に、これらの表現は助詞に相当する機能語として捉えられ、同じ統語的な機能を担う一つのカテゴリーを成すということを論じる。 上掲の「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などの表現には、a)自立せず、さまざまな語句に付属して使われる、b)表現自体の語彙的な意味は稀薄である、c)範列関係上にある複数の項目を連辞上に並べ、それらを統合関係の中に取り入れるという機能を担う、という三つの基本的な特徴が見られる。a)とb)の特徴は、これらの表現は付属語的であるという性格を示し、c)の特徴はこれらの表現は同じ機能を担う一つのカテゴリーとして捉えられるという可能性を示している。 従来の研究では、上のc)に注目し、「にかぎらず」「だけで(は)なく」「かわり(に)」などを一種の助詞相当の機能語として扱っている。しかし、この種の機能語は文法的にどう位置付けるべきか定まらず、ほかの種類の助詞との位置関係は明瞭ではない。このような背景を受け、本研究では次の問題を設定し、この種の表現群の文法的性質を実例で考察する。 【1】 本研究の考察対象はどのような言語単位をいかに並べるか 【2】 本研究の考察対象は一個のまとまった形式として分析できるか 【3】 本研究の考察対象を付属させることにより、どのような文の成分が作れるか この三つの問題関心の結論として、次の考察結果がまとめられる。 - 本研究の考察対象は、単位 A(名詞、句(副詞句、「名詞+助詞」句など)、節)に付属し、A と範列関係にある単位 B を右側に並べる。 - 本研究の考察対象は、構成要素の性質変化に伴い、形態的な固定化が進み、ひとまとまりの形式として認めざるを得ない。 - 本研究の考察対象は、一つの節の外側にあって後続節(の一部)と範列関係を明示する成分を作る。	

本研究の考察対象は、後続節の外側にあり、かつ、意味的に後続節と対等な成分を構成する。これは、これらの形式を平接関係の接続助詞(森田・松木 1989)や、等位節の接続助詞(日本語記述文法研究会編 2008)などとした、先行研究の分析と一致する。一方、直前に現れる言語単位は外形上必ずしも節ではないという点から見れば、節と節を結びつける接続助詞であるとは言い難い。ゆえに、この種の機能語の統語的性質を問うなら、後続節(の一部)と何らかの範列関係があることを明示する成分を構成するもの、と言うしかない。もしこの種の機能語にあえて名前を付けるなら「範列関係明示の複合副助詞」ということになるだろう。

本研究は大きく三つの部分から構成される。序論(第一章、第二章)では、問題提起と問題関心、従来の指摘について述べる。本論(第三章から第七章)では、本研究が設定した三つの問題関心について論じ、考察対象に共通する文法的性質をめぐる本研究の主張を明確にする。その上、考察対象のうち代表的な二形式「にくわえ(て)」、「かわり(に)」を取り上げ、実例を通して本研究の主張を検証する。結論の第八章はまとめである。

以下では、本論にあたる第三章から第七章までの内容を要約する。

第三章では、本研究が目指す「範列関係上にある言語単位を統合関係上に位置づける」機能を考察する。範列関係を表す言語手段を<暗示の手段>と<明示の手段>に分けられると、本研究の考察対象は単位 A に付属し、単位 A と範列関係にある単位 B が右側に現れることを要求し、結果的に AB とも連辞上に顕在させる<明示の手段>の一種に該当する。次に、本研究の考察対象が並べる言語単位のあり方には、【a】典型的な範列関係にある単位同士を並べる用法と、【b】典型的な範列関係に準ずる単位同士を並べる用法、という二つの種類がある。【a】用法では、並べられる前後の単位はそれ以外の文中要素を共有するという特徴があり、その下位分類には、【a1】名詞と名詞を並べるもの(cf. 太郎にかぎらず次郎もそのサークルに参加した)、【a2】句と句を並べるもの(cf. 彼は学問的にはもちろん人間的にも尊敬すべき)、【a3】節と節を並べる(cf. 彼は単位を落とただけで(は)なく、学校から注意も受けた)ものが見られる。一方、【b】用法は見掛け上では【a】のように文中要素を共有する前後の単位を取り出すことができないものの、大きな事態を構成する個別事態同士、あるいは上位概念に属する別個の下位概念同士、すなわち、文脈によっては同一スロットにどちらが出てもよい関係にある単位を並べる。本研究では、これを典型的な範列関係に準ずる用法と見る。さらに、言語単位をいかに連辞上に並べるかという観点から見れば、本研究の考察対象は、ア)常に複数の範列項を連辞上に顕在させなければならない、イ)範列項を必ずしも隣接させなくてもよい、という特徴が見てとれる。これに基づき、本研究の考察対象は<暗示の手段>に属する取り立て助詞や、<明示の手段>に属する

並列助詞などといずれも異なる性質を持つ。すなわち、本研究の考察対象は範列関係の表現手段のうち、独特な位置を占めているといえる。

第四章では、本研究の考察対象は一個のまとまった形式として判断できるかどうかについて考察する。本研究の考察対象は、どのような構成要素から組み立てられるかという観点から、一語表現を含めた五つのグループに分けられる。当該表現の構成要素に文法的性質の変化が起きているかどうかという基準に従えば、五つのグループはいずれもひとまとまりの形式として固定化したと判断できる現象が確認される。そのうち、構成要素に用言を含む表現の場合は、その用言が、a)格成分を支配しなくなる、b)様態・量の修飾を受けなくなる、c)否定辞と呼応する陳述修飾成分などが現れにくくなる、などの現象に特に注目すべきである。これらの現象は、当該表現は本来の文法的性質が変質し、それに伴う形態的な固定化が起き、ひとまとまりの形式として文法化していることの裏付けになると言える。

第五章では、本研究の考察対象の統語的な位置付けについて検討する。従来の研究には、「太郎にかぎらず次郎や三郎も来た」の下線部をひとまとまりとし、「太郎にかぎらず」句が「次郎や三郎」を主要部とする従属成分であるという分析がある。この章では、その分析の問題点を、a) 前件名詞と後件名詞は同じとりたての作用域に収まらない、b)前件名詞は後件名詞をとりまく事態に参加していない、という二つの現象で説明する。その上で、「前件名詞+ α 」句が常に後件名詞の左側に現れるという語順上の特徴を根拠に、「前件名詞+ α 」句は後件名詞を取り巻く節の外側にあり、意味的に後続節と対等であるということを主張する。なお、「前件句+ α 」「前件節+ α 」についても、上の分析が有効であることから、本研究の考察対象は実際に並べられる言語単位の種類と関係なく、常に後続節の外側にあり、後続節(の一部)との範列関係を明示する成分を作ると分析すべきである。

第六章では、本研究の考察対象のうち、“A が P に当てはまることを前提として、その上に B も P に当てはまる”という<累加>の意味関係の代表的な形式「にくわえ(て)」の文法的性質を検討する。「にくわえ(て)」は、a)動詞「加える」が述語になるという文法的能力がなくなる、b)別の要素を内部に挿入できない、c)「加わる」「添える」「付け加える」など、語彙的な意味が<累加>である類義動詞との置き換えができない。これらの現象を根拠に、「にくわえ(て)」がひとまとまりの形式と見なすべきことを検証する。また、語彙的に<累加>を表す連用修飾句「Nに加わって」「Nに添え(て)」「Nに付け加え(て)」と比べ、「Nにくわえ(て)」句は連用修飾の副詞句とは異質であるということを確認する。

第七章では、本研究の考察対象のうち、“A は P に当てはまらず、B が P に当てはまる”という<択一>の関係の代表的な形式「かわり(に)」の文法的性質を検討し、「Nのかわり(に)」句の分布を手掛かりに、語順の違いという表層の現象が異なる構文の現

れであることを実例で説明する。「N のかわり(に)」句には、格成分や連用修飾成分として一つの節の内部で働く用法のほか、一つの節の外部にある用法があることを確認する。後者の用法は、第六章で確認した「にくわえ(て)」の性質とともに、本研究の考察対象が節の外側にあり、後続節(の一部)との範列関係を明示する成分を構成する、という第五章の主張にあてはまるものである。